Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development,
Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences)
2011, Vol. 58, 129 − 135.

日本における反映的自己研究の現状と課題

杉　浦　祐　子[1)]

はじめに

自己研究の中で，自己概念の形成には他者が自分をどう認識しているかについての個人の認識が重要な役割を果たしてきたとされている。つまり，他者との相互作用を通して，他者が自分をどう認識しているかについての個人の認識が形成され，それが自己概念に反映されると考えられてきたのである。Rosenberg（1981）は，他者が自分をどう認識しているかについての個人の認識を反映的自己（reflected self）と定義している。

日本においても反映的自己を扱った研究は行われてきたものの，その際に，反映的自己と同じ意味を持つと考えられる概念をあらわすのに統一された用語は使用されておらず，研究者によって様々である。

本論文では，第1に日本の論文で使用されている反映的自己を表す用語およびそれらの論文で引用されている理論を整理する。第2に，どのような他者の視点での反映的自己を扱っているのかに着目して先行研究を概観する。

反映的自己を表す用語の整理

日本において，他者が自分をどう認識しているかについての個人の認識，つまり反映的自己をあらわす用語は「他者自己」(椎野, 1966;今川, 1992など)，「社会的自己」（小林，2008)，「知覚自己」（山本，2003)，「反映的自己評価」（長谷川・浦，2000；長谷川・宮田・浦，2007；長谷川，2008；長谷川・浦・前田，2009など)，「他者からみられている自己」（藤瀬・古川，2005）や「見られた自己」（楠見，1989）などのように「見られる」という言葉を使用しているもの, というように様々である。(Table 1)。

さらに，同じ用語を使用していても引用している理論が異なる場合もある。たとえば，長谷川他（2007）と長谷川（2007）は「反映的自己評価」という用語を使用しているが，長谷川他（2007）はアイデンティティ交渉過程（Swann, 1987）を引用しており，長谷川（2007）は鏡映的自己（Cooley, 1902）を引用している。逆に，異なる用語を使用しているが同じ理論を引用している場合もある。「他者から見られた自分」（高石，1992）や「他者に映る自己評価」(中山･田中，2007) は，長谷川 (2007) と同様に鏡映的自己（Cooley, 1902）を引用している。それぞれの研究が引用している，反映的自己に関わる理論について，以下に概略する。

鏡映的自己（Cooley, 1902）　自己概念の形成に際して，親，教師，友人など，発達の各段階で重要な他者によるフィードバックが大きく関与しており，James（1890）の社会的自己（social self)，Cooley（1902）の鏡映的自己（looking-glass self）といった概念はこのような自己概念の社会的側面を表すものとして，後の多くの研究の基礎となっている（高石，1992)。

James（1890）は自己を“I（主我）”と“me（客我）”の2つに分けて捕らえることを提唱した。さらに,“me(客我)”は物質的自己（material self)，社会的自己（social self)，精神的自己（spiritual self）の3つに分けられるとした。社会的自己（social self）に関して,「人は，自分を認めてくれる人の数だけ社会的自己を持つ」としている。つまり，人は相互作用を行う他者の数だけ自己概念を持っていると言える。

Jamesの客我論はCooleyやMeadといった象徴的相互作用派（symbolic interactionist）と呼ばれる社会学者に受け継がれ，社会的文脈との関連のなかで発展していった（佐久間，2000)。Cooley（1902）は，個人の自己観には，他者に見られている自分についての想像，他者に見られている自分を他者がどのように判断しているかについての想像，誇りや卑下のような自己に関する感情という3つの主要な要素があることを指摘して，自己概念やそれに対する評価等は，個人の内的世界の中から発生するものではないことを示し（楠見，1989)，鏡映的自己（looking-glass self）の概念を提唱した。

象徴的相互作用派（symbolic interactionist）は，他者

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）（指導教員：平石賢二教授）

Table 1　各反映的自己研究が引用している理論

引用された論文	論文数	用語	著者名
鏡映的自己	10	反映的（自己）評価	山口（2010）
			長谷川（2007, 2008）；
			長谷川・浦・前田（2009）
		他者から見られた自分	高石（1992）
		他者から見た自己	佐久間（2002）
		他者に映る自己評価	中山・田中（2007）
		認知された母親認知	小松（1999）
		他者評価予想	高田・藤崎・森田（1989）
			下坂（2006）
		認知された他者評価	中村（2007）
アイデンティティ交渉理論	3	反映的自己評価	長谷川・浦（1999, 2000）
			長谷川・宮田・浦（2007）
自己不一致理論	5	知覚自己	山本（2003）
		社会的自己	小林（2008）
		他者から見られている自己	藤瀬・古川（2005）
		他者自己	椎野（1966）
			村田（1979）
仮定された自己志向性	3	他者自己	今川（1992）
		他者から見られた自己像	楠見（1989）
		他者によって見られていると思う自己	藤井（1975）
特定の引用なし	3	予測自己	戸田・内田（2008）
		他者から見た自分	梅本（1990）
		社会的自己	堀内（1999）

との相互作用の中で鏡映的自己が形成され，形成された鏡映的自己が自己概念に反映されるとした。これが象徴的相互作用論である（Cooley, 1902；Mead, 1934 河村訳 1995）。

鏡映的自己は反映的評価として操作的に定義されて用いられる（Ichiyama, 1993）。

長谷川・浦（1999, 2000）では，アイデンティティ交渉の理論的枠組みを用いて研究が行われているが，これらの研究では象徴的相互作用論として議論されてきた反映された評価仮説を考慮した分析モデルを用いている。

自己不一致理論（Higgins, 1987） Higgins（1987）は，理想自己（ideal self），義務自己（ought self）を個人の目標である自己の主要な領域としてとらえ，現実自己（actual self）とそれらの自己との不一致が不快感情に関連しているとして，自己不一致理論を提唱した。さらに，Moretti & Higgins（1990）は自己不一致理論にもとづいて理想自己を捉える視点の1つとして他者視点に着目し，理想自己に対する視点を広げた。

藤瀬・古川は（2005）は，現在の反映的自己もまた自己認知の重要な側面と考え，現在の反映的自己と現実自己との不一致が自尊感情に及ぼすことを検討している。

仮定された自己志向性（浜名, 1968） 浜名（1968）は，個人は自分が好意を抱いている相手からは，好意を抱いていない相手からの場合よりも自己のパーソナリティ認知とより一致するように見られていると仮定する傾向があることを確認し，これを仮定された自己志向性現象と呼んでいる。自己認知と反映的自己の類似性の程度の増減に伴って，他者に対する好意度が変化すること（浜名，1968），また，自己認知と反映的自己の不一致状態が対人関係の長さに伴って一致する方向へ変動すること（浜名，1969），自己認知と反映的自己の一致度は相手との関係の左右され，自分だけが相手に好意を持っている場合は，相手からも好意を持たれている場合よりも一致しないこと（楠見，1989）。が示されている。

また，仮定された自己志向性現象は日常的に生起しており，同時点の反映的自己が自己概念に影響している（今川，1992）。

異なった理論に基いているにもかかわらず，同じ用語が使用されていたり，逆に同じ理論に基いていても異なった用語が使用されていたりと，研究者が自由に用語を使用しているように思われる。今後，基いている理論に沿った更なる用語の整理が必要である。

反映的自己を扱った研究の概観

Rosenberg（1981）は，反映的自己が自己概念に影響するかしないかという違いについて，以下の3点によって決定するとしている。第1に，他者がだれであるかという点である。個人が普段関わる他者は，それぞれ異なった視点で個人を見ている。それらすべての見方を自分が受け入れることはできないので，個人にとって重要な他者視点の反映的自己が自己概念に影響する。第2に，自分が自己のどの側面を意識するかという点である。自己概念の構成要素は多くあるが自己概念が確立されている特性において反映的自己はほとんど影響しないため，まだ確立されていない側面において反映的自己が自己概念に影響する。第3に，自分が他者の視点を受容するか，または拒絶するかという点である。個人はネガティブなものよりもポジティブなものを取り入れることを好むため，ポジティブな反映的自己が受容される。

以上3点のうち，他者とのかかわり方や他者の存在に大きく左右されるであろう個人にとって重要な他者視点の反映的自己に着目して反映的自己を扱った研究を概観する。

発達段階別に見る重要な他者視点の反映的自己

様々な年代を対象として，反映的自己を扱うことで自己認知に対する他者による認知の影響のプロセスをより明確な形で検討した実証的研究が行われてきた（小松，1999）。

反映的自己を扱う際には，どの他者の視点を取るのかということが問題となる。先行研究では，個人にとって重要な他者の反映的自己が自己概念に影響する（Rosenberg, 1981）ことをふまえ，反映的自己の対象となる重要な他者が「だれか」という点に焦点が当てられてきた。多くの研究者は1人または複数の重要な他者の視点を取った反映的自己を扱っている（高石, 1992；梅本, 1990；山本，2003；都丸・庄司，2005；長谷川，2007；長谷川他，2007，戸田・内田，2008など）。以下に，研究でとりあげられる児童期・青年期における重要な他者の視点およびその反映的自己についてまとめる。

児童期の特徴　他者の視点から見た自己を描出することには役割取得能力の発達が影響を及ぼすと考えられる（佐久間，2002）。役割取得能力は児童期中期に自己中心的な段階から自己内省的な段階に発達する（Selman, 1976）ため，他者の視点を考慮できるようになる8歳児では他者が誰であるかによって複数の他者から見られている自己を区別できるようになることが示唆された（佐久間，2002）。

児童期後期の児童の身体発育，とりわけ性的成熟は自分にとって違和感を持って感じ取られる経験であるため，自分の体に注目が向くとともに自分自身への関心が向けられるようになる（齋藤，2004）。また，この時期，自己に対する意識は知覚的・外面的な自己から内面的な自己へと広がりを見せるようになる（柏木，1983；佐久間，2002）。

児童期における反映的自己の対象　児童期を対象にした研究では母親の視点を取っているものが多い（小松，1999；中山・田中，2007）（Table 2）。このことについて，小松（1999）は，母親は子どもに評価やフィードバックをもたらし，自己概念に大きな影響を与える重要な他者であり，少なくとも青年期以前の時期においては，親の

Table 2　対象者別反映的自己を扱った論文数（本）

		反映的自己の視点					
		親	教師	友人	重要な他者	複数	その他
児童期		2	0	1	1	3 [a]	0
青年期	中学・高校	0	2	2	2	1 [b]	0
	大学	0	0	10	2	1 [c]	3
成人期		0	0	0	1	0	1

注：複数の時期を対象に研究されている論文は，それぞれに含めたため，一部重複している。
[a] 児童期における複数の視点は，親，きょうだい，教師，友人，一般的他者である。
[b] 中学生・高校生における複数の視点は，親，教師および友人である。
[c] 大学生における複数の視点は，親および友人である。

このような役割が小さくないと考えられている（Harter, 1996）ためであるとしている。

青年期の特徴　青年期には自己への関心が高まり，自己を対象化して客観的に把握するようになる（梅本, 1990）。それとともに，自己の客観化から，他者からの評価つまり「他者から見られる自己」への意識が高くなり（梶田，1998），他者の評価を想像することで自分の自己評価が妥当なものなのかどうか考えるようになる。さらに，青年期以降，他者の反応をもとに形成した自己概念を徐々に自分の見方や価値観をもとに修正し再構築していく（溝上，2008）。

青年期における反映的自己の対象　青年期を対象にした研究では友人や教師の視点を取っている（楠見, 1989；都丸・庄司，2005；戸田・内田，2008など）（Table 2）。これは，青年期は対人関係の中でも友人関係が重要な位置を占めるときであり，友人関係の中で自己についてのさまざまな情報を得て，自己についてのイメージや評価などを形作っていく（梅本，1990）とされているからである。山本・田上（2002）は，特定の友人との関係をはじめとする人間関係が学校生活を快適にする土台となり，人間関係で自己が「ありのまま」に認められないと，その生徒は学校生活の中で揺らぎやすい自己を抱え，教師や友人から否定的に評価されることを過剰に心配するとしている。また，青年は他者との関係の中で「自分らしくいられる場」を求めており，彼らにとって，その「場」すなわち関係の中で安心して自分を解放できることが必要である（平石，2003）ため，学校で「自分らしくいられる」ことは重要であろう。伊藤・小玉（2007）は，「自分らしくいられる状況」として理想自己や現実自己，通時的な現実自己に合っているときを挙げており，理想自己や現実自己，通時的な現実自己との差異が自分らしさの感覚を左右するとしている。自己概念が他者と相互作用の中で形成されることを考えると，理想自己や現実自己，通時的な現実自己との差異だけでなく，反映的自己との差異もまた自分らしさの感覚を左右するものであると考えられる。したがって，「自分らしくいられる」ため，教師や友人から「ありのまま」に認められるためには教師や友人視点の反映的自己が自己概念と類似していることが必要である。

教師は，小学生にとって成績などの評価を行う大人として理解されている（佐久間，2002）。佐久間（2002）は中学生に関して言及していないが，中学生にとっても教師の立場は同様だと考えられる。さらに，学級担任教師の児童生徒に対する働きかけが彼らの学校生活に様々な影響を与えること，友人との関係の認知だけでなく，教師との関係の認知も学校の楽しさに強く影響することも明らかになっている（越・西條，2004）。このように，教師は小学校・中学校において家族外の権力者として児童・生徒に影響力を持っており（高石，1992），小学生や中学生にとって教師視点の反映的自己も重要な役割を果たすと考えられる。

教師は青年期中期（15歳-16歳）において重要な他者とされるが，年齢が上がるにつれて教師視点の反映的自己を気にしなくなる（Tatar, 1998）。そのため，特に大学生を対象とした研究では，友人の視点に限定したものが多くなると考えられる（梅本，1990；山本，2003；長谷川，2007；長谷川他，2007など）（Table 2）。

青年期において親視点の反映的自己を扱った研究は，複数の他者視点の反映的自己を扱った中村（2007）および椎野（1966）のみである。しかし，両親は青年期においても子どもにとって重要であるという知見もある（安達，1994；Tatar, 1998；Blyth, Hill & Thiel, 1982など）。Tatar（1998）によれば，母親は信頼できる一貫した社会的確証の与え手であり，自己に関する情報の門番である。重要な他者は特定の他者に収斂されるというよりはむしろ多様な他者が自己概念の様々側面に影響すると考えられる（高石，1992）。研究では，重要な他者の発達的変遷を考慮し，反映的自己の対象となる他者には，各発達段階において重要とされる他者が選択されてきた。その一方で，他者の多様性も主張されている。

今後の展望

反映的自己の対象となる他者について考えるとき，重要な他者が「だれか」という点においてのみ他者の多様性を考慮すればよいのだろうか。

他者の多様性に関して，2つの視点があると考える。第1には，これまで検討されてきた重要な他者が「だれか」という視点である。第2に，「どのような他者か」という視点から考えられるだろう。家族内外の重要な他者である親や友人は複数の意味や機能を持っている（安達，1994；Tatar, 1998）。重要な他者の多様性を考慮するとき，それが「だれか」という視点だけでは不十分である。

重要な他者の機能に関する先行研究では，だれがどのような機能を持っているかが検討されてきた。安達（1994）は，青年期の自己形成にだれがどのような意味を持って関わっているかを検討している。その結果，両親は，「知識や技能獲得」や「信念・理想の形成」に関わる意味がある他者であった。「態度・価値の形成」，「性役割の習得」には同性の親や友人が意味のある他者であった。友人は「葛藤の解決・自己の安定」に関わる意味がある他者であった。また，Tatar（1998）も，青年にとって家族内外の重要な他者がどのような機能を持っ

ているかを検討している。その結果, 母親はbeliever（私を信頼してくれる人）やsupporter（私が混乱することから守ってくれる人）の機能を持ち，父親はrole model（その人のようになりたいと思う人）やteacher（私の手本となってくれる人）の機能を持っていた。同性の友人はsupporterやchallenger（私の考えに疑問を投げかけ批判する人）の機能を持っていた。教師は同性の友人と同様supporter, challengerの機能に加えてrole modelの機能も持っていた。つまり，同じ「だれか」を想定していても，その「だれか」の持つ機能は複数あり，同じとは限らないのである。そのため，「だれか」という視点を考慮しても，その人の持つ機能を考慮しなければ，自己概念に影響する他者の多様性を明らかにはできないと考えられる。さらに，これまで「だれか」という視点の違いによると考えられてきた反映的自己の違いは，その人の持つ機能を反映している可能性もある。

今後反映的自己を扱う場合には，重要な他者の視点に着目し，だれの視点を取るかというだけではなく，どのような人の視点の反映的自己がどのように自己概念の形成に関わるのかという点からも検討する必要があるだろう。

引用文献

安達喜美子（1994）．青年における意味ある他者の研究―とくに，異性の友人（恋人）の意味を中心として―　青年心理学研究，6，19-28.

Blyth, D.A., Hill, J.P., & Thiel, K.S. (1982). Early adolescent's significant others: Grade and gender differences in perceived relationships with familial and nonfamilial adults and young people. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 425-450.

Cooley, C.H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Scribner's.

浜名外喜男(1968)．パーソナリティ認知過程における“仮定された自己志向性”が対人感情に及ぼす効果　教育・社会心理学研究，8，77-86.

浜名外喜男（1969）．パーソナリティ認知過程における“仮定された自己志向性現象”の生起機制―自然変動分析による研究―　広島女子大学家政学部紀要，4，30-38.

Harter, S. (1996). Historical roots of contemporary issues involving self concept. In B.A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept: Developmental, social and clinical considerations*. Willy & Sons. pp.1-37.

長谷川孝治（2007）．個別的自己評価が自尊心に及ぼす影響―重要性と他者からの評価の調整効果―　人文科学論集，41，91-103.

長谷川孝治（2008）．自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響　人文科学論集，42，53-65.

長谷川孝治・宮田加久子・浦光博（2007）．インターネット上の自己評価と現実の自己評価との相互影響過程についての検討：両者のズレと精神的健康との関連の観点から　社会心理学研究，23，45-56.

長谷川孝治・浦光博（1999）．自己評価に関する自他の相互影響過程の変容についての検討―アイデンティティ交渉の理論的枠組みを用いて―　社会心理学研究，15，110-124.

長谷川孝治・浦光博（2000）．自己評価に関する自他の相互影響過程に対する相互開示の調整効果―アイデンティティー交渉はどのように行われるか―　広島大学総合科学部紀要　Ⅳ理系編，26，47-61.

長谷川孝治・浦光博・前田和寛（2009）．低自尊心者の下方螺旋過程に対する友人関係の進展段階の調整効果　人文科学論集，43，53-65.

Higgins, E.T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.

平石賢二（2003）．思春期・青年期の臨床実践（田畑治・森田美弥子・金井篤子（編）　臨床実践の知―実践してきたこの私　ナカニシヤ書店　pp.39-49）.

藤井洋子（1975）．他者との関連における“自己”―パーソナリティ認知様式に関して―　島根女子短期大学紀要，13，15-21.

藤瀬文子・古川久敬（2005）．自尊感情と自己認知との関係性―他者からみられている自己に着目して―　九州大学心理学研究，6，189-197.

堀内孝（1999）．現実自己，理想自己，および，社会的自己における自己関連付け効果　心理学研究，70，128-135.

Ichiyama, M.A. (1993). The reflected appraisal process in small-group interaction. *Social Psychology Quarterly*, 56, 87-99.

今川民雄（1992）．自己概念の変容過程についての追跡的研究（1）―先行する自己概念の影響と仮定された自己志向性をめぐって―　対人行動学研究，11，13-21.

伊藤正哉・小玉正博（2007）．自分らしくいる・いない生活状況についての探索的検討　筑波大学心理学研究，34，75-84.

James, W. (1890). *Principles of psychology*. 2 vols. New York: Holt.

梶田叡一（編）（1998）．シリーズ自己の探究　意識としての自己　金子書房.

柏木惠子（1983）．子どもの「自己」の発達　東京出版会.
小林祐子（2008）．見られ方の違いと親密度および自己呈示欲求が対人不安に及ぼす影響　甲南女子大学大学院論集　人間科学研究編，6，27-38.
小松孝至（1999）．児童の社会的特性に関する自己認知と母親による認知の差異―母子関係の特徴との関連の検討―　教育心理学研究，47，49-58.
越良子・西條正人（2004）．学年教師集団の雰囲気と教師―生徒関係および学校適応感の関連　上越教育大学研究紀要，24，61-76.
楠見幸子（1989）．パーソナリティの自己認知と他者から見られた自己像の認知との関連―学級内の二者関係とその変化による分析―　実験社会心理学研究，29，27-34.
Mead, G.H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.（河村望（訳）（1995）．デューイ＝ミード著作集　精神・自我・社会　人間の科学社）.
溝上慎一（2008）．自己形成の心理学　他者の森をかけ抜けて自己になる　世界思想社　pp.111-133.
Moretti, M.M. & Higgins, E.T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
村田義幸（1979）．女子短大生の自己概念と適応　活水論文集，22，83-91.
中村裕美子（2007）．自己評価・認知された他者の評価と逸脱行動歴との関係　現代の社会病理，22，103-108.
中山奈央・田中真理（2007）．児童の自身が思う自己評価及び他者に映る自己評価が自尊感情に与える影響　教育ネットワークセンター年報，7，45-57.
Rosenberg, M. (1981). The Self-Concept: Social Product and Social Force. In Rosenberg, M. & Turner, H. (Eds.), *Social psychology: Sociological perspectives*. New York: Basic Books. pp.593-624.
齋藤誠一（2004）．「思春期」という時期―難しい年頃を知る―　児童心理，58，16，1470-1475.
佐久間路子（2000）．多面的自己―関係性に着目して―　お茶の水女子大学人文科学紀要，53，435-451.
佐久間路子（2002）．子どもの「他者からみた自己」に関する理解の発達　乳幼児教育学研究，11，23-31.
Selman, R.L. (1976). Social-cognitive understanding: A guide to educational and clinical practice. In T. Lickona (Ed.), *Moral Development and behavior: Theory, research, and social Issues*. New York: Holt.
椎野信治（1966）．適応の指標としての自己概念の研究　教育心理学研究，14，165-172.
下坂剛（2006）．社会人における自己評価と他者評価予想のずれと無気力感の関係　中九州短期大学論叢，28，3-15.
Swann, W.B., Jr. (1987). Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1038-1051.
高石浩一（1992）．自己概念の形成にかかわる他者　心理学研究，63，1-7.
高田利武・藤崎眞知代・森田由紀子（1989）．コンピテンスの自己評価と他者評価予想とのずれ―青年期の自己再構成における「人まえ」への恐怖感と自己価値への影響―　群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編，39，277-290.
Tatar, M. (1998). Significant individuals in adolescence: adolescent and adult perspectives. *Journal of Adolescence*, 21, 691-702.
戸田尚登・内田一成（2008）．中学生の自己評価および予測自己と学校適応感との関連―生物－心理－社会モデルを通しての予備的検討―　上越教育大学心理教育相談研究，7，25-35.
都丸けい子・庄司一子（2005）．教師と生徒の関係と学校適応―教師の生徒認知と生徒の自己認知のズレを中心に―　子ども社会研究，11，75-85.
梅本信章（1990）．青年期における友人関係の機能について　盛岡大学紀要，9，47-55.
山口雄介（2010）．児童期後期における自尊感情と自己評価・友人からの反映的評価との関連　九州大学心理学研究，11，203-211.
山本都久（2003）．不適応の測度としての現実自己と他の自己イメージのズレについて　富山大学教育学部紀要，57，121-128.
山本淳子・田上不二夫（2002）．中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連　筑波大学心理学研究，24，263-272.

（2011年9月30日受稿）

ABSTRACT

An overview of researches on reflected self in Japan

Yuko SUGIURA

A review of Japanese research on reflected self, how the individual believes others see him or her is presented from 2 points of view. One is in terms of Japanese technical term of the reflected self. The other is from the perspective of who is a significant other.

In Japan, many kinds of words are used to represent the reflected self. First, I overviewed the articles dealing with it and categorized them in terms of theory each of them are based on. About one third of those are based on the same theory, the looking-glass self which introduced by Cooley despite some of them use different term.

Second, I overviewed those articles from the perspective of who is a significant other. People believe that they create reflected self and it influences self-concept. Who is a significant other is one of important factor in deciding whether reflected self influences self-concept or not. Many researchers asked children how you believe your mother see you. They also asked adolescence how you believe one of your best friend see you.

But a significant other has some functions. Although a significant other is a friend, influence of reflected self on self-concept may be different by functions of a significant other.

I propose that discussion on how reflected self influences self-concept will discuss from the perspective of not just what kind of significant other influences it, but how they do this.

Key words: reflected self, technical term, significant others, functions of significant others